

## 「土のう」による道直しプロジェクト見学 ( JICA 小規模園芸農民組織強化計画のサイト見学 )

京都大学総合人間学部 3 回生 福田佳恵

9月10日から約2週間ケニアに滞在し、その中でJICA小規模園芸農民組織強化計画の1セクションである、道づくりのプロジェクトを見学しました。見学の日には、ターゲットとなる地域の代表者に会いに行き、実施しようとしていることの概要を伝える、実際に作業に参加することになる地域のメンバーと合流し、実施ポイントを下見・決定する、という2点が行われ、これから修繕しようとする道の現状を知るとともに、活動が実施されるまでのプロセスの一部を知ることができました。

最初の目的地に向かう道中、早くも驚くような道路状況を目の当たりにしました。私は降雪地方の出身で、車がスリップして後部が左右に振られるといった状態は初めての経験ではありませんでした。幸い、私たちの乗っていた車は道に対して十分な力も備えていましたし、スタックすることなく進み続けることもできました。しかし窓の外を見れば、泥の上で止まったままのバス、両足を地面にもどす構えのまま走るバイク運転手と、そこにはスムーズな人・物の流れを実現するための「道」は存在していなかったのです。当然ながら、この地域において、すべての人が道のぬかるみを乗り越えられる力の強い車を持つことができるわけではありません。また、実際にデコボコ道は50メートルやそこらで終わるものではなく、かつ人々が農産物輸送として求める移動はたった30分で着く距離のものにはとどまりません。このままでは、生産者と市場とを積極的につなぐ「Physical Link」としての効果はおろか、場所によっては両者を“遮断”する存在のようにすら見えました。

特に、ケニアにおいてはナイロビという都会があり、また、乾燥により農作物を育てにくいエリアも見てきました。中心部のビル群や郊外の工場を持つナイロビ、そして牧畜中心の半乾燥地域と見ているとわかるように、この国でバランスよく生活を維持・向上させていくためには、それぞれのエリアが適切な役割を持ち、成果を相互に移動させることが必要なのかもしれません。こう考えても、道路をスムーズな輸送のツールに改善するというこの活動が非常に重要性の高いものだということを感じました。

さらに、今回の地域に先立って活動が行われエリアで、プロジェクトチームによる指導期間後に地元住民が自主的に橋の修繕をしたというお話を聞きました。私にとって、「外部からのきっかけ作りがなくなった後はどのようにして活動の効果を継続していくのか」ということが大きな疑問でしたので、この事実にはとても驚かされました。この日の見学では、実際に人がたくさん集まって土のうを作ったり並べたりするシーンは見られなかったのですが、いったい参加者たちがどのような表情・様子で作業に当たっているのかはわかりませんが、きっとこの道づくりのやり方や、指導の進め方がケニアの人々に非常にマッチした方法でなされているのだと思い、これについてもぜひ今後見てみたいと感じました。これから CORE に活動のベースが引き継がれていく道づくりプロジェクトですが、今以上に地元の人たちのやる気と力が発揮される形で、ケニアにどんどんよい道が増えていくことを期待しています。